



大阪府立北野高等学校図書館

第 1 号

2015. 6. 12 発行

ついこの間新しい年度が始まったかと思えば、もう6月になり、梅雨に入りました。この時期、本を読んで鬱陶しい梅雨模様を忘れましょう。

読書環境において、北野生は大変恵まれている。図書館の蔵書の数が多い。新刊も続々と入ります。図書館に来て、あなた自身の“お気に入り本”を探してください。

今回、図書館に新しく入った本を中心にいくつか紹介します。本の後にある(913/M83/4)などという記号は図書館での請求番号です。

本の読み方 スロー・リーディングの実践 平野啓一郎 PHP 研究所
(019/H5/1)

本を速く読みたい！ ———— それは忙しい現代人の切実な願いである。だが、速読は本当に効果があるのか？ 10冊の本を闇雲に読むよりも、1冊を丹念に読んだ方が、人生にとってははるかに有益である ———— 著者は、情報が氾濫する時代だからこそ、スロー・リーディングを提唱する。古今の名作を題材に、本の活きた知識を体得する実践的な手法の数々を紹介。特別な訓練は不要。「工夫次第で、読書は何倍にも楽しくなる」のである。

川端康成の『伊豆の踊子』の中の一節を例に挙げて、日本語の特殊性を記している。「日本語は、英語のような言語と違い、主語の省略が頻繁で、述語との関係が必ずしも明確ではない場合がある・・・」。『伊豆の踊子』の英訳本では、主語を取り違えている箇所があるようである。この本には、そこをきちんと読み解く技術も示されている。

医と人間 井村裕夫（編） 岩波新書 (490/I3/1)

医学・医療は、いま大きな転換期にさしかかっている、と言われている。中年以降に多い糖尿病や冠動脈疾患などの慢性の非感染性疾患が全世界で増加し、国連が各国に対策を呼び掛けるほどになっている。これらの疾患はいったん発症すると全治がむずかしいものが多く、個人にとっても社会にとっても大きな負担になる。したがって治療よりも予防が重要であり、また発症した場合には再生医療などのより優れた新しい治療法が求められている。さらに、精神疾患、あるいは子どもの発達障害の増加も全世界的に認められ、その原因の解明と対策が大きな課題となっている。

一方、医学の社会的な実践ともいべき医療に目を転じると、高齢者の増加と医療技術の進歩に伴う医療・介護費の高騰が、全世界で大きな問題となっている。特に急速に少子高齢化が進んでいる日本では、現在の医療制度の維持が困難となりつつあり、近い将来、社会の基盤を揺るがすほど深刻な問題になると言っても過言ではない。

戦後のベビーブームの時代に生まれた人が、本年（2015年）ですべて65歳を超えた。これから医療や介護を必要とする人口が急増することは疑いがなく、それに対応するために我々は何ができるか。我々は、このような社会の変化を自覚し、この長寿社会をどのように生き抜くかを真剣に考えなければならない。

医学・医療が直面しているさまざまな課題について、その概要をiPS細胞の山中伸弥博士ほか10名の方々が述べている。

絵でわかる感染症 岩田健太郎 講談社 (493 / 19 / 1)

昨年（2014年）日本では69年ぶりにデング熱の国内流行が、そして西アフリカのエボラ出血熱の流行が話題になった。

感染症は我々の生活に密接に関係している。風邪も、エイズのような一種特殊な病気も感染症である。21世紀になっても感染症は重要な領域だ。

「感染症とはいったい何か。」から、この本は始まる。

「感染症とは、微生物が原因となる病気のことです。微生物がいなければ、感染症は絶対に起きません。そこが、糖尿病とか、脳卒中とか、痛風とか、他のいろいろな病気との決定的な違いです。

けれど、微生物が人にくっついている『だけ』では感染症と呼びません。

というか、微生物って人体にくっつきまくっているのです。一見きれいな(?)皆さんの顔も、手のひらも、口の中も、腸の中も微生物でいっぱいです。これらの微生物はあなたと共生しており、むしろあなたの体に利益を提供してくれています。腸の細菌は食物を分解し、栄養の吸収を助けています。微生物側としても、周りとうまくやっていった方が楽なんです。

風邪を引いたりして抗生物質を飲むと、お腹を壊す人がいます。抗生物質は外敵だけでなく、人に利益を与えている腸内細菌も平等に殺してしまいます。だから、抗生物質により腸内の細菌叢（腸管内に『住んでいる』いろいろな細菌の群れのこと）が乱れてしまい、下痢をしてしまうのです。

このように、人間は『普段は』微生物と仲良くやっており、その微生物がいなくなるとかえって病気になったりします。

微生物がなければ感染症は起きません。しかし、微生物が人間にくっついているだけでは感染症ではありません。その微生物が人間に害を与えたとき、はじめて『感染症』と呼びます。」

いのちはどう生まれ、育つのか ————— 医療、福祉、文化と子ども
道信良子（編著） 岩波ジュニア新書 （369/M11/1）

この本は、現代社会に生きる子どもたちのいのちの多様性を描いている。

子どもたちが生まれながらにそなえているそれぞれの身体の特性と、それらのいのちを守りはぐくむ行為や、子どもを取り巻く環境が影響し合い、いのちはゆたかな多様性をおびる。出産をひかえたお母さんと子どものやりとり、生まれてすぐに治療を受けている赤ちゃんの看護、障がいをもつ子どものリハビリテーション、ダウン症の子どもの子育て、被災地に暮らす親子を支える子ども家庭福祉などは、それぞれにかけがえのないいのちをはぐくむ場です。子どもを感染症から守るための予防接種、子どもが生みの親以外の人と親子関係を結ぶ慣習、いのちのみとりなどもいのちをはぐくむ制度です。ネパール共和国とザンビア共和国のお話は、国や文化のちがいが子育てや健康作りのあり方も大きく変えることを示している。

現代の日本社会は、大きな構造変動の中にあって、安定した生活を送り、将来を正確に見通すことがむずかしい状況にある。その中で、現在の社会に対する不安感や閉塞感をもって生活している多くの人たちがいる。同じ思いを持っている子供たちもいるだろう。いま、あらためて、広い視野に立ち、子どもたちがどのように生きているのか、その現実を正しく知る必要が生まれている。

子どもたちは、未来を描きにくい状況の中で、夢や目標を持たず、生きることの意味がわからなくなっている。また、放課後や休日も含めて、一日の時間の多くをおとなによる管理や支配のもとに生き、よい子になろうと懸命に努力している子どももいる。いじめや暴力が増え、ささいなことがきっかけになってキレル、パニックになる、事件を起こす例もある。子どもは非行を通して悲鳴をあげているのだ。

この本を読み、いのちの多様さと尊さを学び、医療や福祉に関わる仕事に関心をもつきっかけになればと思う。

異常気象と地球温暖化 ————— 未来に何が待っているか

鬼頭昭雄 岩波新書 （451/K17/1）

ここ 50 年の地球の気候が変化してきていることは事実であり、これには疑いの余地がない、と著者は言う。地上気温が高くなっているばかりではなく、海洋も温暖化しており、積雪面積や北極の海氷は減少してきている。人間活動が気候に影響を与えてきた可能性が極めて高いと科学者は評価している。その最も大きな原因は、産業革命以来の人間活動による大気中への二酸化炭素の放出である。

一方で、熱波や大雨・豪雨など、災害をもたらす異常気象が毎年のように起こっている。異常気象とは、人が一生の間にまれにしか経験しない、大雨や強風などの短時間の激しい気象現象や、数ヶ月も続く干ばつや冷夏などのことである。

熱波が頻繁に起こったり、大雨の程度や強雨の激しさが増したり、強い台風が襲来したり、もともと雨の少ない地域で干ばつが続いたり、世界のあちこちで気候が変化してきている。地球温暖化はこれに拍車をかけることになるだろう。

地球の気候は、人間活動による温暖化がなくても、常に自然に変動している。そのため、常に世界のどこかで「異常」気象が起こるのが、むしろ「正常」といえる。しかしながら、異常気象の程度が激しくなることや、あまりにも頻繁に起こるようになってくる要因の一つに、地球温暖化があることが明らかになってきた。

世界の科学者は、地球温暖化の影響を予測すべく、過去に起こった気候変動の実態と原因を調べることから、今世紀中に起こる可能性のある気候変化や災害をもたらす極端な気象現象まで、研究を進めている。この本では、現在までに分かったこととともに、このような知見をどのように活かしていけるかを紹介している。I P C C（気候変動に関する政府間パネル）が2013年～2014年に提出した第五次評価報告書には、気候変動の自然科学的根拠、温暖化の影響、そして、対策がまとめられている。

地球温暖化の悪影響は異常気象に限らない。今対策を始めないと後悔することになる。

☆次は、社会科 A先生が推薦する書物です。

辞書になった男 ケンボー先生と山田先生 佐々木健一 文藝春秋

(813/S15/1)

新解さんの謎 赤瀬川原平 文藝春秋 (914/A2/3)

ケンボー先生と山田先生はともにベストセラーとなった国語辞典の編纂者である。ケンボー先生は、『三省堂国語辞典』を編纂した見坊豪紀。山田先生は、『新解さんの謎』で有名になった三省堂『新明解国語辞典』を編纂した山田忠雄。

大学で同級生だった二人の学者が、ある日を境に絶縁状態となった。『新明解国語辞典』には奇妙な用例がのっている。

【時点】一月九日の時点では、その事実は判明していなかった。

『新解さんの謎』の著者、赤瀬川原平も妙に具体的な用例に着目している。「一月九日である。それははっきりしている。でもそれが何なのかはぜんぜんわからない。一月十日にはわかったのか。辞典なのに新聞みたいだ。」さらにこうも書いている。「一・二・三版にはこの用例がなく、四版ではじめて出てくるという。何か私小説を感じる。」

二人の人生を克明にたどるうちに、一月九日にいたる事情が明らかになる。対立した二人が各々の辞書にかけた情熱に驚かされた。『辞書になった男』という書名が示すように、国語辞典に生涯を捧げた二人の大学者への尊敬の念が本書には満ちあふれている。読み終わったあと、さわやかな気分になった。